農用林政策と農家の燃料問題（要旨）

九大　堀谷　勉

1. 農用林問題の展開　　林野の分化、林業技術の集約化は必然的に、農山村に於ける自給生産を主目的とする、所謂農村林業というカテゴリーを明確化しようとする。農村林業の対象になる林地の大部分は農用林である。この農用林に対して終戦後は特に農業部面から、開拓地に於ける附帯林野の問題、農地調整法第14條による林野の使用収設定の問題等が起つた。

2. 農用林政策と基礎資料　　こゝに農用林政策が確立されるべきだが、その基礎になる資料は甚だ乏しい。農用林野用益の実態は手近に在りながら、その量的把握は勿論質的にも充分解明されていない。「農用林の適正規模」として、経営規模中農の農家で林野1町歩を要するという数字とし、600万農家に対して農用林として600万町歩の林野を要するという結論を出したら如何、是には甚大いに疑問がある。

3. 燃料問題　　農家が農用林に期待する産物の中燃料が量の点でも価値の点でも最も重要である。これは経営の差による消費量の違いが必ずしも顕著でない。燃料という消費財はその豊かな場合は飽くまで放漫に、乏しき場合は極度に切詰めて消費される性質を持つ。

4. 農用林系下の燃料経済実態調査　　九大林政学教室は今夏福岡郡八女郡矢部川流域の三ヶ町村に、農用林の基礎資料蒐集の意味で、農山村燃料経済実態調査を実施した。最上流水源地の山村矢部村は縣下随一の林業村で用材林業の残滓が村内燃料を十分賄い特に農用林の存在を必要としない。約四里下流の黒木町の山村は最も農用林的色彩が濃く、農家に薪、粗朶、燃料を給する。又四里半下流の水田村は水田地で農作物の茎稈　藁、畦畔の柳、芦などが主な燃料になる。遠からぬこの3町村は、燃料生活に於て質的にも量的にも大差があるが夫々一応の安定状態を保ている。今3町村の標準的農家一戸当りの消費燃料を総熱量（キロカロリー）で比較すると、矢部村〔4914万〕、黒木町〔1660万〕、水田村〔1039万〕となる。

（本調査研究は文部省科学試験研究費による）　（昭25.11.6）

造林補助金政策の意義と性格に就て

九州大学　黒田迪夫

I.　造林不振は一般に造林者が造林 — 育成林業を経済的価値獲得の手段としては不利なものと考え、その気持からそれと選択関係にある他の一層有利な仕事に労働及び生産手段等を転じている事に原因している。従つてこの造林不振問題に対処するには現実の政策としてはこの方向がありう